



学校だより

令和8年度 7月号
横浜市立庄戸小学校

笑顔がかがやく 子どもが主役の学校

～感動いっぱい 夢いっぱい 一人ひとりのよさや可能性を引き出す教育を推進します～

庄戸小ホームページ <http://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/shodo>



ある本との出会いから学んだこと

校長 黒木 健

今月の「学校だより」は、私の昔話から話をさせていただければと思います。それは中学3年生の夏休み頃のことだったと記憶しています。ある「英単語の語源」についての本を何気なく読んでいた時のこと、それまでとはいささか異なる、不思議な感覚を覚えたことを今でも思い出すことができます。その本には、当時の私が知らないことがたくさん書かれていました。例えば、「豚は野原にいる時には“Pig (ピッグ)”なのに、なぜ料理されて食卓に並ぶと“Pork (ポーク)”になるのか。同様に、牛の“Cow (カウ)”は“Beef (ビーフ)”に、また、羊も“Sheep (シープ)”が“Mutton (マトン)”になってしまうのか。」そうしたことに興味をもったこと自体、当時の私は少し変わった中学生であったのかもしれませんが、でも、その本に書かれてあった答えが、その後の私の英語学習に大きな影響を与えることになったのは間違いありません。その本によれば、「そうした“二重言語状態”は、11世紀中頃に起きたノルマン人の征服によって、イギリスの上流階級や知識階級の使う言葉がフランス語になってしまったことによるもので、それらの動物を飼うのはイギリスの土着系民族、そして、それを料理してもらって口にするのはフランス語系の上流階級の民族であり、それぞれが“自分たちの言葉”を使ってそのものを指したことにその由来を求めることができ、それらが現代英語にもそのまま残っている。」というものでした。

こうしたことを知って、また、それが一つのきっかけとなって、中学1年生から学んできた「英語という教科」を別の角度からも眺めることができるようになりました。また同時に、この本を読む前と後とで、確実に頭の中が変化していることにも気が付いたのです。こういう体験こそ真の意味で、「本を読むこと」に該当するのではないかと感じています。本を読む前と後とで、頭の中に何らかの変化が感じられなければ、それは「通読した」、あるいは「目を通した」ということであって、「本を読んだ」というところには至っていないのではないかと思っています。

また、こうした関心事を抱いたことから、その後、「なぜ主語が三人称単数だと続く動詞の現在形語尾にはsが付くのか。」といったようなことにも疑問は広がっていきました。誰もが中学校に入学して初めて英語を学んだ頃、「主語が三人称単数の場合、続く動詞の現在形語尾にはsを付ける。(例) She likes running.」と習ったことと思います。もし、生徒が「先生、どうしてその場合には語尾にsが付くのですか？」と質問すれば、もちろんその理由をしっかりと説明してくださる先生もいらっしゃると思いますが、一方で、「英語ではそう言う。だから覚えるしかない。」と返されたという経験をおもちの方もいらっしゃるのではないのでしょうか。因みにその理由ですが、「現在のドイツ語やスペイン語など、英語を除く多くのヨーロッパ言語には、三人称単数現在のsのような格変化(人称による動詞語尾の活用)が複数残存しているのですが、英語にもかつては同様の格変化が存在していたものの、様々な異民族に使用される過程で複雑な活用が長い時間をかけて徐々に落ちていって単純化し、三人称単数現在のsだけが現代英語に唯一残ったというものです。つまり、sが付くということではなく、残存形の一つにすぎないということです。」

学びとは、一つに「どうしてそうなっているのか？」と、その理由や背景を問うことから始まるのだと思います。子どもたちが自らの疑問を大切にしながら、日々の学習に取り組んでいくことの大切さを改めて感じているところです。